

「騎馬戦型から肩車型へ」は現状誤認!?



保険研究部 上席研究員・公的年金調査室長 中嶋 邦夫
nakasima@nli-research.co.jp

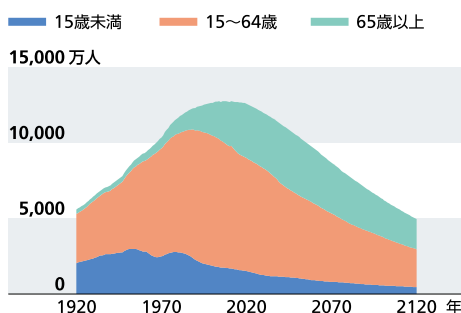


なかしま・くにお
95年 日本生命保険相互会社入社
02年 ニッセイ基礎研究所
07年 東洋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了

図表1は、私が一般の方へお話しする際によく使っている図である。日本の人口を約100年前から100年後まで描いたもので、「100年前の5000万人から現在は倍以上になり、100年後には5000万人に戻る見通しになっています。ただし、65歳以上の比率は50年前と大きく違い…」などとお話して、年金改革の経緯の話につなげている。

【図表1】日本の人口の経緯と見通し1
(年齢区別・1920～2120年)

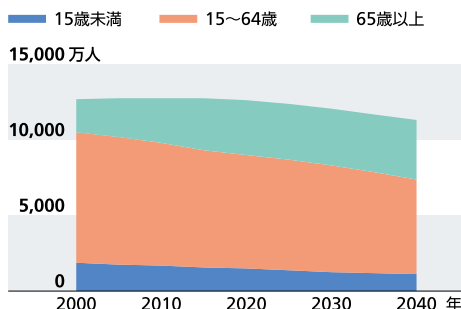
注：毎年の値。2021年以降は見通し(出生中位・死亡中位)
資料：総務省「国勢調査」「人口推計」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(2023年推計)」より作成



100年前から100年後だと実感が湧きにくいので、20年前から20年後に絞って見たのが図表2である。15～64歳の人口が減少して65歳以上の人口が増えている現状や見通しを読み取れる。

【図表2】日本の人口の経緯と見通し2
(年齢区別・2000～2040年)

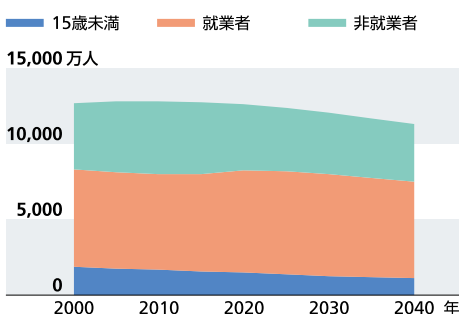
注：資料：図表1と同じ



しかし、15歳以上を就業者と非就業者に分けると様相が異なる[図表3]。就業者数は、2000年に6500万人で、2010年にはリーマンショックなどで6300万人に減少したが、2020年には6700万人に増加しており、2040年は6400万人と見込まれている。ごく大雑把に見れば、この期間には大きな変化がない、と言えよう。

【図表3】日本の人口の経緯と見通し3
(就業状態別・2000～2040年)

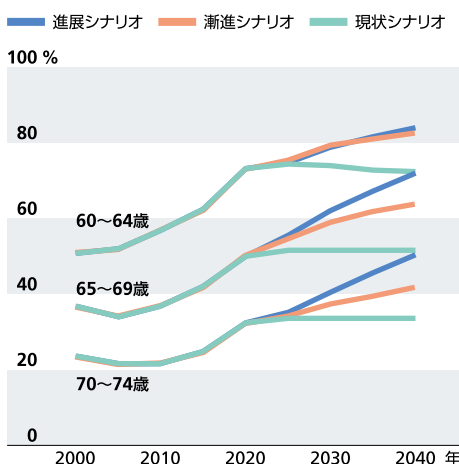
注：5年ごとの値。2025年以降は見通し(労働参加漸進シナリオ)
資料：独立行政法人 労働政策研究・研修機構「2023年度版労働力需給の推計」より作成



このように15～64歳の人口が減少する一方で就業者数に大きな変化がない理由の1つは、高齢期の就業率の上昇である[図表4]。60代前半は2000年代の初めから、60代後半や70代前半は2000年代

【図表4】就業率の経緯と見通し

注：資料：図表3と同じ

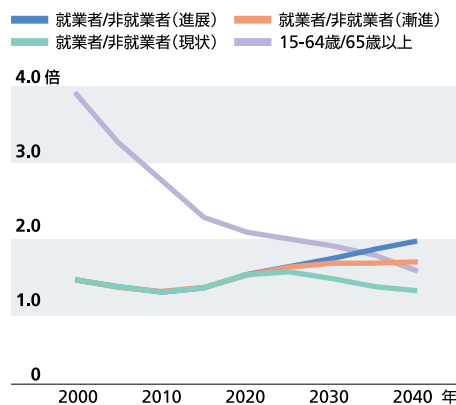


の後半から、上昇傾向が続いている。

日本の人口構成、特に現役世代が高齢世代を支える構図については、以前のおみこし型や胴上げ型から騎馬戦型に移り、今後は肩車型になっていく、と言われていいる。だがこれは、15～64歳人口と65歳以上人口の比率(図表5の紫の線)など年齢構成の比率を見たものに過ぎない。就業者と非就業者の比率で見れば、ここ10年以上は上昇傾向にあり、今後の就業率が現状どおりだったとしても、就業者と非就業者の比率に大きな変化はない見通しになっている(図表5の緑の線)。

【図表5】人口構成比率の経緯と見通し

注：資料：図表1、3と同じ



確かに、就業者以外にも社会の支え手は存在するため、就業者と非就業者の比率が現役世代が高齢世代を支える構図を正しく示しているとは言い切れない。しかし、健康寿命の伸展や高齢期の就業率の上昇により、65歳以上の全員が支えられる側というわけでもない。年金などの社会保障制度を論じる際は、騎馬戦型や肩車型という年齢で区分した見方だけでなく、就業などの視点も加えて複眼的にとらえる必要があるだろう。